【絵巻「大江山絵詞」第2巻第3段】

かやうに申、われ〳〵をおにのたくひと(類)
思ひたまふへからす、われも去かたき
人を鬼にとられ、此かたきをとらんかた
めに此ところに候得とも、われらかちから(がカ)
計にては叶かたくして、とし月を
此山にておくり候なり、面〳〵もこゝ
ろおきたまふへからす、かた〳〵を見奉
るに、たゝ人にておはせす、是へ入給へ、
くわしく申さんとて、うちへしやうし(招)
いれてけり、いかにも此ものゝこゝろ
をとらむとて、さけをとり出して
すゝめけり、三人の中にも主人とお
ほしくて座上に居たる翁、さかつきを
ひかへて申やう、かた〳〵のさほうを見る
にふかくねんしたまふことありと
見えたり、ありのまゝにかたり給へ、われ
〳〵ちからをあわせ申さん、鬼かいわや
のありさまをもくわしく存して候
へは、をしへ申へし、千騎萬騎を
そつしてむかひたまふとも、人のちから
ハかりにてハゆめ〳〵かなふへからす、神
明の加護をもつて、ほろ(滅)ほしたまへ、

と、まことにふたこころなけにそ申しける、
心のほとを残さす丁寧にかたり
たまひけれハ、よりミつ(頼光)めゐ猶うち
神のちからをそへたまふにてそと、
たのもしくおほしめして、ありのまゝ
にそかたり給ひける、其時座上に居給ひける
おきなの申さく、此おにもさけを愛
してのみ候へは、身のうする事をも
しらす、うちとくるものにて候なり、此
酒をよく〳〵のませて面〳〵ハ相
かまへてひとくちもまいり給ふへからす、
是ハすなハち毒のさけにて候なりとて、
うちよりさけをとり出しかた〳〵の
さゝへ(小筒竹筒)のあきたるにそ入れてもたせ
ける、またほしかふと(星兜)をひとつとり
出しよりミつ(頼光)にたひ候とて、是をは
ときん(頭巾兜巾)のしたにきたまふへし、
此おにはしんつう(神通)のまなこ(眼)をもつて、そ
の人をよく〳〵見て、人のこころのうち
をもしる(知)ものなり、此かふとをたにも
きたまひなは、これをしる事ゆ
め〳〵あるへからす、又その身のつゝか(恙)
もあるましきなり、たのもしく
おほしめし候へとてそ申されけれ、かの

おにハ神通自在にして
人をたふらかし候もの、
はかり事
言葉に
及はす能く
こころへ
給ふへし